

# 過疎を考える

——利賀村の人口動態に関する 2, 3 の調査——

富山県農村医学研究会

豊田 文一

福野保健所

小坪 昭子, 藍口 陽子

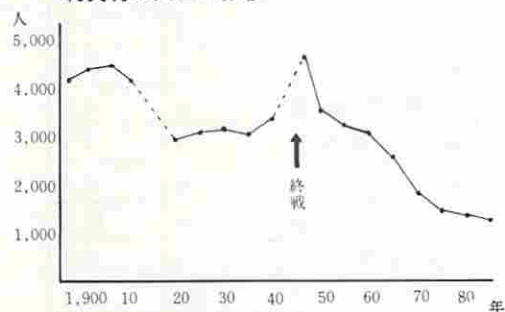
嶋田 潤子, 中田 慶子

## はじめに

毎年、福野保健所が、利賀村地区において、いわゆる移動保健所の形式により住民の健康診査を続けている。私もこれに参加し、主として耳鼻咽喉科の健診に当たっているが、かねてより山村の人口動態、すなわち人口の減少の推移に関心をもち、これに参加された人々の協力により農村社会学の観点から 2, 3 の調査を行ったので報告したい。

利賀村は、平坦地農村から隔離された山村と考えられ、村の最も大きな問題は人口の減少である。これを 1900 年（明治 33 年）より今日に至るその推移をみると図示する如くなる。

利賀村の人口の推移



数値的にその動向を辿ると、明治 40 年 4,596 人、明治 45 年 4,118 人、大正 9 年 2,981 人、昭和 5 年 3,204 人、昭和 15 年 3,230 人、昭和 22 年 4,663 人、昭和 30 年 3,246 人、昭和 40 年 2,568 人、昭和 50 年 1,611 人、昭和 59 年 1,243 人と昭和

40 年代より激減している。

利賀村は東西 20km、南北 52km、面積 176.3 平方 km でひとつの郡市に匹敵する。標高の最低 179m、最高 1,638m であるが、最低は庄川下流地域で、集落は概ね 400~600m の間に介在する。気温は昭和 57 年で最低  $-4.7^{\circ}$  (1 月)、最高  $27.4^{\circ}$  (8 月) を記録している。降雨日数 168 日、雨量 2,476mm、積雪量は最低 1.05m (昭和 54 年)、最高 4.25m (昭和 56 年)、過去 10 年間平均 2.86m に達する。人口動態をみると過去 10 年間 (昭和 47~58 年) 出生死亡の自然増減では 163 名増、社会動態、すなわち転入転出の状態では 279 名減となっている。

以上は利賀村における地域の概要であるが、さらに調査した事項を記述し考察を加えてみようと思う。

## 調 査 成 績

移動保健所の健康診査は、老人保健法に準じて行われたので、年齢的にはほとんど 40 歳以上の人々である。私どもの調査対象にしたのは既婚女性 167 名で、個々面接によって行った。

まずその出生児数について調査した。

第1表 出生児調査

出生児数	母 親 数	百 分 率	出生児総数
0	6	3.5%	0
1	6	3.5%	6
2	24	14.4%	48
3	67	40.1%	201
4	25	14.5%	100
5	25	14.5%	125
6	10	6.0%	60
7	1	0.6%	7
8	1	0.6%	8
9	1	0.6%	9
10	1	0.6%	10
	167		574
母親1人当り出生数 3.44人			

これは第1表に示す通り、出産の経験のないもの6名(3.6%)のみで、最多は10名である。出生児574名で、平均3.44名となる。なお出生児は3名が67名、40.1%で最も多く、次で4および5名は各25名、14.5%である。この数値を調査しているうち地域によって差異のあることを感じた。それは利賀谷と百瀬谷の平均出生児数である。これを分別すると第2表、第3表に示す通りである。

第2表 出生児調査(利賀谷)

出生児数	母 親 数	出生児総数
0	1	0
1	5	5
2	12	24
3	39	117
4	19	76
5	22	110
6	8	48
7	1	7
8	1	8
9	1	9
10	1	10
	110	414
母親1人当り出産数 3.76人		

第3表 出生児調査(百瀬谷)

出生児数	母 親 数	出生児総数
0	5	0
1	1	1
2	12	24
3	28	84
4	6	24
5	3	15
6	2	12
	57	160
母親1人当り出生児数 2.81人		

すなわち利賀谷においては、母親1人当り3.76人に対し、百瀬谷は2.81人で、出生児は前者において1人多い。

次にこれらのうち生存しているものについて、その離村状況について調査してみた。これを第4表に示す。その数は550名で、村内居住は139名、25.3%、 $\frac{1}{4}$ で、他は離村している。離村しているものの第1位は県内で、215名、39.1%、次で近畿で70名、12.7%、東京・東海30名、5.4%、石川28名、5.1%、関東甲信越24名、4.4%、その他の地域は少ない。

第4表 離村者動向調査

離 村 者 居 住 地	数	%
県 内	215	39.1
石 川	28	5.1
福 井	5	0.1
東 京	30	5.4
関 東 甲 信 越	24	4.4
東 北 ・ 北 海 道	4	0.1
東 海	30	5.4
近 畿	70	12.7
中国・四国・九州	5	0.1
村 内 居 住	139	25.3
	550	

なお、離村者の県内転出の動向をみると第5表に示すように呉東、呉西約50%で相半ばしているが、地域的にみて、砺波地区(東砺波郡、砺波市、福光町)は30.7%が多い。し

かし近接している婦負郡の八尾、婦中町は少ない。

第5表 県内居住の分布

県内居住地	数	%
婦負（八尾、婦負）	22	10.2
その他の呉東	84	39.1
砺波（東砺波郡、砺波市、福光町）	66	30.7
その他の呉西	43	20.0
計	215	

第6表 婚姻調査

婚姻関係	組	%
村内同志	138	65.4
村外から	73	34.6

第7表 村外からの婚姻調査

婚姻関係	組	%
県内から	48	65.8
県外から	25	34.2

さらに婚姻関係について調査を行ったが、これは受診者の女性に本人のみならず、その両親についても質問を試みた。これは第6表に示す。

その数値は212組で、村内同志138組、65.4%、村外からは73組、34.6%、また村外からの婚姻を調べてみると第7表に示す如く、県内48組、65.8%、県外25組、34.6%であった。なお県外からの婚姻で近畿が10組もあった。

第8表 出生児調査

出生児 年 齢	0	1	2	3	4	出生児数	平均 出生児数
29才以下 (91名)	22 24.1%	35 35.5%	29 31.7%	5 5.4%		108	1.19
30～39才 (553名)	21 3.8%	110 20.0%	308 55.7%	100 18.1%	14 2.5%	1,082	1.96
40～49才 (337名)	10 3.0%	54 16.0%	212 62.3%	56 16.6%	5 1.5%	688	2.04
50才以上 (54名)	6 11.1%	15 27.8%	26 48.1%	7 13.0%		88	1.63
合 計 (1,035名)	59 5.6%	214 20.7%	575 55.6%	168 12.2%	19 1.8%	1,966	1.88

た。

総括並びに考察

20数年前、教室員とともに利賀村地域の学童の耳鼻咽喉科検診に、小牧より利賀川の峻嶒な溪谷の山腹を削りとられた隘路を曲折しながら、利賀村に到着した経験がある。車の通行の可能もそう古い時代ではなく、峠道に過ぎなかったらしい。平野部に通ずる道は二つあった。一つは井波に通ずる夏の道、一つは八尾へ通ずる冬の道である。この二つの道も山腹を這う迂余曲折の坂道であった。その交通は難渋を極めたといわれる。しかし地域開発が進み、昭和44年百瀬谷と利賀谷を結ぶ檜尾峠（利賀村利賀と比高 270m）が開道し、さらに道路の改良、ことに拡巾と舗装により、昔日の感はなく、バスの運行もなされている。

その開発が急速に進められているなかで、まず、人口動態が如何なる推移を辿っているか、山村社会の概要を知る上で重要なことにならうかと思い、調査を行ったわけである。その遂年の人口動態については先に述べたが、出生児について考えてみたい。調査の結果母親1人当たり平均出生数は3.44人であった。私は昭和58年20才以上の既婚女子農協職員1,035名についてその出生児数を調査したが、第8表の如く1.88人で、利賀村調査の約2/3である。



なお、農協女子職員の約8割は農村地帯に居住している。これらについてその出生児の寡小、即ち受胎調節について質したが、近代的文化生活の甘受、育児余裕の不足、とくに最近の高学歴社会への願望、それによる将来の教育費の増高が主な原因に連がることを知りえた。また、最も奇異に感じたことは、利賀谷と百瀬谷の平均出生児数であり、前者は3.76人、後者は2.81人で、大きな相違のあることである。その原因について明かにしえないが、二つの谷で風俗あるいは社会的環境のちがいがあのではなからうかとも疑われ、今後機会があれば検討したいと思っている。ただ五箇山といえば、上平、平、利賀の三村を総称しているが、「越の下草」(宮永運著)、「越中志徴」(森田柿園編著)によると五箇山とは赤尾谷、上梨谷、下梨谷、小谷、利賀谷の五つの谷の総称であると記されている。これは五つの谷間で、この谷間をヤマと読んで、五つの谷あいの集落している山里の意味と受けとれる。これには利賀谷はあるが百瀬谷はない。地勢的には利賀川は南下して庄川へ、百瀬川は神通川へ流れ、しかもこの間は、櫛尾峠に連なる山梁によって分離されている。そのため、この両者へは呉西、呉東の習俗がそれぞれ入りこんできたのではなからうかと想像される。このことは、あるいは出生児数に連がるかも知れない。しかしこれはあくまで私見である。

次に離村動向であるが、これは面接によりその家族の離村後の居住地である。えられた人員は550名、そのうち村内居住139名25.5%であり、県内の居住39.1%、県外では、近畿は70名、12.7%、東京、東海はそれぞれ5.4%、石川県は5.1%であった。とくに近畿の多いことは注目すべきで、宮崎重美著「五箇山——失われる山びとの暮らし——」に次のようなことが記されている。「大正から昭和の初めまで、村から大勢の娘たちが、滋賀県の本木や長浜へ出稼の糸ひきに行っていたが、

正月になると柳行李に土産を一杯に詰めて帰ってくる。八尾の町へ着いて出迎えを待っていると、雪の晴間をみて、山を下った父親たちが、3、40人もの隊列を組んで待ちかねた娘たちの前へ姿をみせる。しかしゆっくり語り合う間もなく荷造りにかかる。行李を縦かづきにして、上には町での買物をのせ、ケットをかぶせる。行李の縦かづきは、狭い山際に荷をふれさせない工夫である。7、80人の隊列はゆっくりつづら折の坂道を柄折峠(大長谷と利賀村の間の峠)へと向ってゆく、雪が降ると途中で民宿をする。晴間をみて出発した隊列を柄折峠まで今度は若いものが迎えに出る。荷かずきが交代して隊列は150人位となる。それぞれの家へ着くのは10時頃になる。そうすると家々では留守番を残して、母や弟妹たちまでが、途中まで灯りをつけて迎えにくる……」

これは夏の道、井波—利賀の道は閉されて、冬の道といわれる八尾—柄折峠—利賀へと出稼の娘たちの正月の里帰りの物語である。

私は40才以上の女性について、この出稼について調査したが、近畿方面の兵庫、京都、また県内では福野町の紡績工場へ出稼に出た経験を有するものが多く、ことに京都の西陣へ赴いたものもあり、現在村内に西陣織の工場もある。このように近畿と密接な関係があり、離村者の転出は、県外では近畿が最も多いことが想像される。なお県内では呉東、呉西相半ばしているが、砺波地区の多いのが目立つ。これは現在の交通状態を考えてよからう。

さらに婚姻関係の調査を行ったが、村内同志65.4%、村外からは34.6%、村外からの婚姻73組のうち県内65.8%、県外34.2%で、県外25組のうち10組は近畿からであり、上記の出稼の状況からもうなずけると思う。ただここで考えられるのは村内同志の婚姻で、現在40才以上の女性では、外部との接渉、交流も少く、結局村内においてまとめあげられて

の婚姻の比率が高いように感ぜられる。しかし他地域の婚姻関係の資料を見出せず断言するにはばかる。

さて、五箇山地域はよく過疎地帯といわれている。過疎とは何か。辞書を調べてみたが、「まばらすぎること、ある地域の人口が少なすぎること」などと明快な答を与えてくれない。ただし公式にこの言葉が登場したのは昭和41年経済審議会の地域部会の中間報告として記載されたものである。そのなかに過疎について「都市への激しい人口の移動は、人口の減少地域に種々の問題を提起している。人口減少地域における問題を“過密問題”に対する意味で“過疎問題”と呼び、過疎を人口減少のための一定生活水準を維持することが困難になった状態、たとえば防災、教育、保健など地域社会の基礎的条件の維持が困難となり、それとともに資源の合理的利用が困難となって地域の生産機能が著しく低下することと理解すれば、人口の減少の結果、人口密度が低下し、年齢構成の老齢化が進み、従来の生活パターンの維持が困難となりつつある地域では過疎問題が生じ、また生じつつあると思われる」

また、岡津氏はへき地教育について論ずるなかに、その社会的概念として「一般に僻地の〈むら〉は、生産性が低く、その生業は未文化で、家族労働に依存しており、経済的には貧困で、生活水準は極めて低い。家族制度のなかに家長制の型がみられ、旧来の遺制（前近代的）を多く残存している。その上交通に恵まれず、周囲からの文化の滲透も薄く、その停滞性が著しい。医療施設、娯楽機関もほとんどない。人々は広大な地域に散在して生活をしており、衣食住のすべてにわたって自給自足の場合が多く、たいへん遅れている」

飢えて利賀村の現状はどうか。人口は確かに減少の一途を辿っている。昭和年代の始めまでは、小学校卒業するや娘たちは糸ひきの出稼に出る。その様相は先に述べたように

“ああ野麦峠。”と全く変らない哀史ともいえる。しかし今は県道も改良整備され、冬といえども雪対策によって交通の杜絶はまずないといつてよい。医療機関も一診療所があり、初期医療は確保されている。

また、過疎の一つの問題点となっている人口の老齢化について調査してみると、富山県全般に比較して第9表の如く50才以上の人口の比率は利賀村において遙かに高く、30才代は著しく低い。この年代は中堅の労働人口ともいえる。

第9表 年齢階層別人口分布

年齢階層別	利 賀 村	富 山 県
0～9才	10.3%	15.3%
10～19才	13.5%	11.4%
20～29才	11.1%	12.2%
30～39才	10.3%	17.3%
40～49才	14.2%	13.9%
50～59才	20.2%	11.3%
60～69才	10.6%	8.6%
70才以上	11.9%	6.9%

昭和55年国勢調査

次に産業について、昭和35年より20ヵ年の推移を観察してみると第10表の如くである。これには著しい変化がみられる。第一次産業において著しい変化があり、昭和35年1,230名より89名へと激減、ことに農業、林業の衰微は著しく、農業については第10表に示すように現在専業は278戸のうち僅かに3戸、第2種兼業は274戸で、零細農業または片手間農業ともいえる(第18表)。林業も435戸より64戸と、最近外材の輸入のため全く搬出もなく、かつては山村の重要な収入源も過去の夢となっている。しかし米作は人口に対して余剰があり、産米政府売渡数量は2,558俵(昭和56年)で、主食については自給自足ができる。その他の農産物については第12表に示す。このうち特徴的のことは甘茶と薬草栽培で、甘茶は仁丹の甘味用で比較的高齢女性の副業として収入源となっている。また漁業も、いわ



な、にじます、鯉の放流または養殖も盛んで、観光のための外来者用や近接の地域への需要

に供している。

第10表 産業別就業者数の推移

(人)

区 分	35 年 度			40 年 度			45 年 度			50 年 度			55 年 度		
	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女	総 数	男	女
	1,611	830	781	1,292	693	599	1,146	593	553	897	506	391	812	474	338
第1次産業	1,230	549	681	756	364	392	473	198	275	179	72	107	89	39	50
農 業	795	213	582	499	123	376	331	58	273	137	32	105	64	20	44
林 業	435	336	99	257	241	16	142	140	2	41	39	2	15	14	1
漁 業	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	10	5	5
第2次産業	215	179	36	388	238	150	446	261	185	384	226	158	376	220	156
鉱 業	9	9	0	12	6	6	11	9	2	11	8	3	12	8	4
建 設 業	142	128	14	302	183	119	298	214	84	249	191	58	254	176	78
製 造 業	64	42	22	74	49	25	137	38	99	124	27	97	110	36	74
第3次産業	166	102	64	148	91	57	227	134	93	330	206	124	347	215	132
卸、小売業	23	9	14	16	6	10	32	11	21	26	7	19	31	12	19
金融保険業	2	1	1	1	1	0	0	0	0	1	1	0	0	0	0
不 動 産 業	0	0	0	14	9	5	0	0	0	0	0	0	0	0	0
運輸、通信業	18	13	5	7	7	0	22	14	8	30	16	14	33	21	12
電気、ガス水道業	11	11	0	76	40	36	9	9	0	16	14	2	17	16	1
サービス業	92	50	42	33	28	5	111	59	52	187	112	75	204	122	82
公 務	20	18	2	1	0	1	52	41	11	70	56	14	62	44	18
分類不能の産業	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0

第11表 農家数及び人口

(1980年世界農林業センサス)

農 家 数	専 兼 別			経 営 規 模 別					農 家 数	農 家 人 口
	専 業	第1種兼業	第2種兼業	0.3ha未満	0.3～0.5ha	0.5～1.0ha	1.0～1.5ha	1.5ha以上		
278戸	3戸	1戸	274戸	75戸	76戸	109戸	15戸	3戸		1,173人

第12表 主要農産物の生産状況

(57年度実績)

(単位 俵：t, a)

	米	キャベツ	白 菜	茗 荷	か ぶ	ほうれん草	わ さ び	甘 茶	薬 草	養 蚕
生 産 量	5,000	138	40	5	15	5	0.4	8	1.5	2.0
作 付 面 積	8,300	350	120	250	500	50	38	800	100	760

第二次産業では建設業が顕著で、林業から転じた男性、さらに女性もこれに従事している。村内では各所に道路、トンネルの土木工事が進められ、労働可能な人々はこれに従事し、収入源の重要なものとなっている。

第三次産業では、サービス業の発展がめざましい。道路の拡幅、さらに整備され、各方面から多数の観光客を誘致し、各地区にホテ

ル、旅館、ことに民宿の増加が著しい。ことに早稲田小劇場の創設を始めとし、各種研修施設、保養所の設置、また数多い行事、文化財も脚光を浴び、さらにスキー場の設備など、春夏秋冬、観光に訪れる人々が絶えない。かつては陸の孤島、過疎地帯といわれた利賀村も昔日の感はない。

以上私は、今年利賀村への移動保健所の行

事に参加し、人口動態の2, 3について調査し、過疎といわれていたこの地を検討してみた。ことに農村社会学的に過疎という定義を脳裡に浮かべながら、人口の減少は著しいものがあるものの産業、生活の面からみると、すでに過疎より脱却していると考えられる。ただ医療において広汎な地域にわたる村落の点在で、問題点もあると思われる。しかし健康管理の面では、保健所、城端厚生病院を中心とした保健活動も成果をあげている。村民自体も「自分の健康は自分で守る」ことに徹して、健診に際して、全員受診されることを切望する。

結びとして、宮沢章二の詩をかかげ、五箇山の谷々の心を写す。

天に向って屋根たちは合掌する  
それは 長い風雪に耐えようとする祈り  
であった

茅葺きの屋根が支える山峡の暮らしにも  
いつか あかあかと電燈がともったが  
心に揺れ動く燈明は いまも消えない

仏壇のなかには 幾世かの霊たちが生き  
子孫らの鼓動のかたわらを低徊しつつ  
降り来る暗夜の白雪に聴き入っている冬

天に向って屋根たちは合掌する  
燃え立つもの すべてが 深い祈りであ  
った

#### <引用文献>

- 1) 富山県統計情報課：とやま けんせいようらん、昭和59年
- 2) 利賀村：利賀村村勢要覧 資料編
- 3) 宮崎重美：五箇山 失われる山びとの暮らし、富山文庫4、巧玄社
- 4) 豊田文一他：富山県農村における乳児栄養調査 富山県農村医学研究会誌、第16巻、昭和60年
- 5) 今井幸彦：日本の過疎地帯、岩波新書
- 6) 余田博通、松田治郎：農村社会学、川島書店
- 7) 村落社会研究会：村落社会研究、第11集、御茶水書房
- 8) 石崎直義：秘境 五箇山、北国出版社